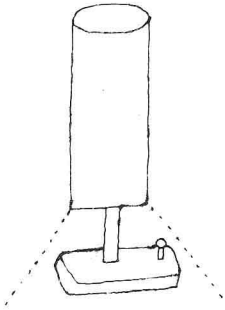
花嫁読本

田辺聖子

田辺聖子

花婿読本



花婿読本

昭和四十九年五月三十一日　初版発行

検印廃止

著　者　田辺聖子
発行者　遠藤左介
印　刷　松濤印刷株式会社
製　本　加藤製本株式会社
発行所　（主婦と生活社内）
番町書房

東京都中央区京橋三ノ五　〒一〇四TEL
（五六七）〇三一一振替　東京一五八四四
©一九七四　田辺聖子

0093-710180-6959

花婿読本　目次

喪服記 7
壇の浦 35
山家鳥虫歌 65
浮舟寺 93
さくらんぼ 121

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

中年 149
蒸発旅行 181
武門の意気地 209
花婿読本 257

装幀　和田　誠

花婿読本

喪服記

堀河帝の寛治年中（一〇九〇年前後）の夏のある日。

蔵人所の小舎人（下っぱ役人）である良兼は、役所がひけると、大いそぎでわが家へかえった。

このところ数日、朋輩にさそわれて帰り道に飲みあるいているので、今日ぐらいは早く帰って実績を作らなければならぬ。でないと今日あたり、妻がヒステリーを起すことは目にみえているのである。妻はおそろしい焼餅やきである。

それというのも、良兼が風貌に似合わぬ、女好きのする男だからで、まったく背は低くずんぐりして男ぶりは冴えないけれども、どういうかげんか、女が付いて仕方がない。また良兼自身も割合小まめに、ちょこちょこ気を引いたりちょっかいを出したりするものだから、妻はそれを気に病んで、何ぞというと、逆上してあららかにののしりさわぎ、上を下への大騒動になる。

このごろではあることないことについてなやまされるので、良兼はほとほと手を焼いて、当分身もちをつつしみ、自粛している最中なのである。そうしてわき目もふらずトットと帰る。

都大路は雑踏している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

しばらく雨が降らないので、道は乾き上って白い埃が舞いたち、家々の板葺屋根は反りかえり、日中のほてりが町の底に重くよどんで、たそがれて来てもまだ暑さがきびしい。

京の夏は堪えがたい。そこへもってきて、あつくるしい市女笠の女、ねずみ小袖に、白髪を藁しべでたばねた薄汚ない老婆、くたびれた旅僧、ひっきりなしの人出である。

裸の子供を抱いて、胸乳もほうり出して立話をしている下司女たち。足駄をはいて騒々しくしゃべりながら打ちつれてゆく、大学寮のなま学生らしい一団。

築土のきれ目の路地では、うす夕闇にまぎれて、かつぎ女が裾をはねあげてうずくまり、小便している。

その路地を南へ下って、東の小路に折れるとひときわにぎやかな見世（市場）が続くが、いまはもう日暮れなので、追い追い店じまいの最中である。

その一軒の布地をうる店の女が良兼をみつけて虫くい歯を見せながら、

「おかえりやす」

とにっこりした。良兼の家の隣に住む番匠（大工）の女房で、毎日、この市場へパートタイムで働きにきているわけである。

「いやあ、どうも暑うおすなあ」

良兼はぱちりと蝙蝠を鳴らして愛想よく笑い返した。そういう所が良兼の憎めないところだと人はいう。番匠の女房が手桶の水を柄杓でまこうとすると足駄がよろけたので、根が女に甘い良兼はすぐ手を出して、

「持ったげまひょ、貸しなはれ」
と女房の手をにぎった。醜女だがぽちゃぽちゃして、色白の肉づきのいい女なので、手も丸くふくよかであった。
「よろしおす」
と女房があらがった。良兼はひったくり、
「ま、よろしがな」
もみあう拍子に、桶の水が波立って、良兼の袴の膝から下をざぶっと濡らしてしまった。
「あっ、えらいこっちゃ、どないしまひょ」
「いや大事おへん」
「お家へお帰りやして叱られはるのと違いますか、オホホホ」
女房が笑うのは、良兼の妻のひどいヤキモチを知っているからである。
「加茂川を徒歩で渡った、いうてお言いやすか」
「夕立におうた、いいまひょ。アハハ」
良兼はもういちど、女房の手をにぎりたそうににこにこして、（やらこい体しとるなあ）と思いながら別れた。
網代壁をめぐらした粗末な長屋のわが家へかえると、一つになる男の子が裸でころがって泣きわめいている。
日中の暑さが家の軒端にたゆとうていて、小さな家の中はまだ、むうっと暑い。

「どや、今日は早かったやろ」
良兼は手柄顔に言われぬ先に言って、床へあがろうとしたら、妻はかまちの所で凄い顔をして、片膝立てて手を組み、じろっと夫の姿を眺めている。
「それ、何どす？」
「何や」
良兼はビックリしたが、今日は何もやましいことはない筈である。妻はキッと目をすえ、
「それ、何で濡れてますのや、その袴」
「あ、これか、こら、さっき、あしこの市場で手桶につまずいたんや」
「なんでどす。何ぞ、つまずくようなことしはったんどすか」
「あほくさ。措いてんか。それより早よ、これ乾かしてくれ。明日の朝着るもんがないわえ」
良兼は貧乏なくせに、オシャレである。萌黄の狩衣と縹の袴を慎重に脱ぎ、とくに袴は濡れているので、そのまま檜皮の垣にそっと掛けておいた。それからともかく裸になって、体をふく水はないかと見廻した。
小男だが、筋肉質によく引き緊った、いい体格である。良兼は三十七で、いかにも若々しい精力的な、元気な、つるつるした浅黒い、たるみのない肌をしている。
妻は、怨みのこもった、愛執のある目つきで、くやしそうに良兼の裸身をにらんでいた。
その怨みは長い長い怨みである。
昨日や今日の怨みではない。前世から約束ごとのつづきのような、ふかい怨みである。良兼が裸に

なって鼻唄をうたっていると、妻は、くやしさが増して来たとみえ、猶も声はげまして、
「何でや。何でそんなとこが濡れますのや。おかしゅうおすな」
「そやよって、桶蹴とばした、ていうてるやないか、まだいうてんのかいな」
「そないうまい具合にこじつけても、ちゃあんと、わかってますのや、早よ早よ言いなはれ、今日はどこの小路のおなごどすか」
「しんきくさい、それより早よ、飯たべよか……ほらほら、ややこが泣いているがな」
「なんや、返事につまったらあれや」
妻は冷笑した。痩せて口ばかり大きい、頬の削けた女である。怨むがごとく呪うがごとく、いつも眉間に筋が二本立っている。
「酒はどないした。昨日のがあるやろ」
「もう、とうにおへん。あんた飲まはりましたやろ」
「飯はまだか」
「いつもおそいさかい、今日もおそいやろ思うて、これから支度するのどす」
「ほな、乾飯に水かけて食べよ。暑いさかい、その方がええ」
「乾飯も切れております」
「何やいな、何も食わせへんつもりかいな、亭主が汗かいて戻って来てんのに、水ぐらい汲んどいたらどないやねん」
「わてが汲まんかて、汲むおなごは、沢山おいやすやろ。どうぞそこへいて、体なりどこなり、洗う

とくれやす」
「ええかげんにせんかい！　あることないこと、うるさいわい」
「うるそういわすのはどっちのせいどすか。たまに早う帰って来たおもうたら、おかしなとこ濡らして……」
「おかしなとことは、何じゃい」
「腰から下濡らして帰って来て、言いわけに詰まって、これがおかしのうて、何どすか」
妻は金切声をあげた。良兼が再び衣をつけようとすると、
「やあ、また外へ出ていかはる！　そない外のおなごがええのんか、こりゃどうや」
と良兼の手にむしゃぶりついて、したたか拳を噛んだので、さすがに良兼もカッとした。
いったい、今まで彼がこらえていたから、済んでいたのだ。もう、がまんできん。
夫婦になるまでは心やさしい、尋常なおとなしげな女だと思っていたのに、今はさながら悪鬼羅刹もかくやと思われるばかりである。
ヤキモチだけならまだよいが、そのあげくに妻のすべきこともせず、飯も食わせぬ、衣服もすすいでくれぬ、夜は一夜中うらみ言をいって眠らせない、ただもう夫が憎い憎いで頭はカッカとのぼせあがり、二三日もの間言い募って夫のいうことは耳にも入れない。
それが一日二日の休みでもあろうことか、一年中、朝から晩まで責め、そしり、ののしり、いやみを言い、あてこすり、拗ねるわ、物を投げるわ、はては良兼の本どりにむしゃぶりつくわ、まるで物狂いか夜叉である。一緒になって以来、良兼は一日として、心おだやかに暮らしたことがない。

これが夫婦であろうか。
もうもう、辛抱たまらぬ、ヤキモチがこうじて物狂いになるとは見下げはてた女である。
針ほどのことを棒ほどに想像し、ああいえばこう、こういえばああ言い、それで夫を言い負かして勝ったつもりでいるのか、バカオンナめ、誰がもう、こんな女にがまんしてつきあっていられるものか、金輪際ごめんだと良兼は妻の顔を見るのもイヤになり、まだ濡れている気味わるい衣服を大いそぎでまとうと家をとび出した。妻がムササビのように大手をひろげて飛びついて来たので、一発、
「ピシャッ」
と頬げたをなぐって、妻の体を蹴りつけてとび出した。女房はかまちから転げ落ち、
「あわわわ、わてを殺して出ていけッ、出るなら殺して出ていけッ、くそったれメ」
などと髪かきむしってはだしのまま門口に立って罵っている。
「薄情者、人でなし、外道、わてを蹴ころがしてよくも出ていったな。あわわわわ」
良兼はできるったけ、早足でわが家を離れた。見っともなくてあたり近所に長年、彼は頭が上がらないのであるが、妻はそういう、男の世間に対する配慮や気苦労など、考えてもみないのである。
世間に吹聴するかの如く門口で大声にわめきちらし、夫の恥わが身の恥もかまわず、ただもう、浮気ばかりに気をとがらして物狂いしているのである。
「まあまあ、気イおちつけて。どない、おしやしたん」
と近所の女たちがかけよる声がするので、良兼はますます腐って逃げるようにその場を離れた。良兼は一軒おいた隣の家の女が気に食わないのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.